

中村文「『無名草子』冒頭部の構想」『埼玉学園大学紀要 人間学部篇』5号、

二〇〇五年十二月。

星山健「入場の物語への系譜における『無名草子』―聞き手老尼の経歴および

年齢に着目して―」『日本文学』56巻6号、二〇〇七年六月。

安道百合子「夕顔巻における中将の君の「いみじき」返歌―『無名草子』の人

物評を手がかりにして―」『日本文学研究』42号、二〇〇七年一月。

古門香「『無名草子』の女性論―伊勢の御息所を中心に―」『信大國語教育』20

号、二〇一〇年十一月。

大野ロベルト「女のしわざ―『無名草子』の批評空間―」『アジア文化研究』37号、

二〇一一年三月。

桜井宏徳「『大鏡』に始まるもの―『今鏡』『無名草子』を中心として―」『国文

学解釈と観賞』平安朝文学史の輪郭、76巻8号、二〇一一年八月。

田渕句美子「『無名草子』の作者像」『国語と国文学』中世の随筆・日記、89巻

5号、二〇一二年五月。

田渕句美子「『無名草子』の視座」『中世文学』57号、二〇一二年六月。

田仲洋己「『無名草子』の一面」『国語と国文学』92巻1号、二〇一五年一月。

前田香緒里「『無名草子』に見る「女」の価値観―「捨てがたきふし」に注目

して―」『語文論叢』33号、二〇一八年七月。

早川華代「俊成卿女の出家をめぐる―『無名草子』作者としての可能性―」『叙

説』47号、二〇二〇年三月。

早川華代「『無名草子』伝来小考」『人間文化総合科学研究科年報』36号、二〇

二二年三月。

横溝博「『落窪物語』と『夜の寝覚』のへ事件―平安朝物語文学史の再構

築に向けて―」『国語と国文学』平安朝文学史の再構築、98巻5号、二〇

二二年五月。

高木和子「風葉和歌集の源氏物語理解―無名草子、物語二百番歌合の系譜から

―」『国語と国文学』平安朝文学史の再構築、98巻5号、二〇二二年五月。

『無名草子』では、自分自身を律し、他人への気配りをする「心用ぬ」が大
事なことと捉えられていたと考えられる。今後、「国文学概論Ⅰ」「国文学史Ⅱ」
の講義で『無名草子』を取り上げる際には、教科書の問いにあった「御心柄」
だけでなく、「心用ぬ」など「心」に着目して説明していきたい。

注

- (1) 新編日本古典文学全集40『松浦宮物語 無名草子』小学館、一九九九年。
以下、頁は開始頁を記す。ふりがなは一部にとどめた。
- (2) 「紫式部のこと」―『古典B 古文編』大修館書店、二〇一六年(五〇、
大修館、古B三二〇)／『紫式部』―『精選 古典B 古文編』明治書院、
二〇一六年(一一七、明治、古B三二六)／「清少納言・紫式部」―『高
等学校 古典B 古文編』三省堂、二〇一四年(一五、三省堂、古B三
〇四)・『高等学校 標準古典B』第一学習社、二〇一六年(一八三、第一、
古B三二四)・『古典文学選 古典A』教育出版、二〇一六年(一七、教育、
古A三〇二)／「清少納言」・「紫式部」・「文」―『精選古典B 古文編』
東京書籍、二〇一六年(一、東書、古B三〇二)／「清少納言と紫式部」・「文」
―『高等学校 古典B』第一学習社、二〇一六年(一八三、第一、古B
三二八)・『高等学校 古典B 古文編』第一学習社、二〇一六年(一八三、
第一、古B三二二)・『古典B 古文編』数研出版、二〇一六年(二〇四、
数研、古B三二四)。／「小野小町」―『古典B』桐原書店、二〇一六
年(二二二、桐原、古B三二七)／「文」―『精選古典B』三省堂、二
〇一六年(一五、三省堂、古B三〇六)・『新編 古典B』教育出版、二
〇一六年(一七、教育、古B三〇九)・『高等学校 古典B』第一学習社、
二〇一六年は二〇一四年検定済。他は二〇一三年検定済。

- (3) 『高等学校古典B 古文編』三省堂、二〇一四年。
(4) 新編日本古典文学全集26『紫式部日記』小学館、一九九四年。
(5) 田渕句美子『女房文学史論―王朝から中世へ―』序章 女房文学史論
の射程』岩波書店、二〇一九年、一五頁。
(6) テキストは新潮日本古典集成『無名草子』、一九七六年(新装版二〇
一七年)を使用。

- (7) 用例検索にジャパンレヅジの新編日本古典文学全集を利用した。
(8) 『日本国語大辞典』第二版、小学館。以下同。用例は省略した。
(9) 田渕句美子注(5)前掲書「第五部 教え諭する女房たち―教育がひら
く回路」第一章、四四四頁。
(10) 新編日本古典文学全集21～23『源氏物語』②④、小学館、一九九五
一九九六年。
(11) 新編日本古典文学全集50『宇治拾遺物語』小学館、一九九六年。
(12) 新編日本古典文学全集28『夜の寝覚』小学館、一九九六年。
(13) 新編日本古典文学全集31『柴花物語』①、小学館、一九九五年。
(14) 新編日本古典文学全集34『大鏡』小学館、一九九六年。
(15) 新編日本古典文学全集38『今昔物語集』④、小学館、二〇〇二年。

参考文献

- 『無名草子 注釈と資料』和泉書院、二〇〇四年。
樋口芳麻呂『無名草子』の発端』『国語と国文学』55巻10号、一九七八年一〇月。
森正人「無名草子の構造」『国語と国文学』55巻10号、一九七八年一〇月。
後藤晃子『無名草子』における人物評価語句について』『日本語文化研究』4

号、二〇〇一年二月。

『栄花物語』に六例、

世を知りたまはんにもいとめでたき御心用ぬをと、かへすがへす思しまどはせたまふ。(二三八頁)

東三条の大臣、世の中を御心のうちにしそして思すべかめれど、なほうちとけぬさまに御心用ぬぞ見えさせたまふ。(二〇五頁)

一条の大納言は、母もおはせぬ姫君を、わが御懐にておほしたてまつりたまへれば、よろづいとつつましき世の御心用ぬなれば、つつましう思しながら、(二二五頁)

わが御ころざしも思ひきこえたまふうちに、宮の御心用ぬも憚り思されて、おろかならず思されつつありわたりたまふ。(二五八頁)

その姫宮、えならずかしづきこえさせたまふ、いささかかたほなることもなく、ものきよき御仲らひなり、中務宮の御心用ぬなど、世の常になべてにおはします、いみじう御才賢うおはするあまりに、(四三四頁)

子をさへ生ませたまひけるに、この御あたりにおはし初めて後は、こよなき御心用ぬなれど、なほをりをりのもの紛れぞ、いと心づきなうおはしける。(四五九頁)

『大鏡』に二例、

同じ種一つ筋にぞおはしあれど、門別れぬれば、人々の御心用ぬも、また、それにしたがひてことごとになりぬ。(二二頁)

まづは帥殿の御心用ぬのさまざましくおはしますまば、父おとどの御病のほど、天下執行の宣旨下りたまへりしままに、おのづからさてもやおはしますままし。(二九五頁)

「御心用意」が『夜の寝覚』に二例、

「憂きはものかは」とおぼしめさるるに、「もし、ありがたしと思ひ知り、

参りたまふやうもやある」の御心用意に、正三位の位賜はせて、「いと若々

しく、慕はしげなる御気色も、おぼつかならず出で入りたまふべう」などおほせられて、車もうけたまはりて、宣旨下るを、「いと殊なる御心用意は、なほ内侍督の御おぼえなどのいみじきに、ひかれたまふにこそは」と、人々おどろき、(三三七頁)

あるのみである。『今昔物語集』に一例ある「心用」は、然レバ人尚態ニハ不依マジ、只心用也。(二七四頁)

と、まともな心をもっているかが肝腎という意味である。第二章で取り上げた「心用ぬ」の用例のうち、最初の二例「我から心用ぬ」は、『無名草子』特有の使い方である。自分自身でする心遣い、自制心をさしている。『無名草子』の『露の宿り』論では、

大弐が娘こそいとほしけれ。『扇の風を身にしめて』などあるほどはいみじ。八条の人も、我からはいとよし。一条の上といふ人こそ、などやらむ、憎けれ。(二五二頁)

と、「心用ぬ」が省略された形の「我から」という語が用いられる。『露の宿り』も散逸物語であるため詳細は不明であるが、八条の人が自制心がある点がとても良いと評している。

現在では「用意」という語は「準備」の意味で使われているが、『日本国語大辞典』に、

よう・い【用意】〔名〕①よく気をつけること。深い心づかいのあること。意を用いること。②ある事を行なうにあたり、前もって備えておくこと。準備しておくこと。したく。③競技などをはじめめる前に、準備をうながすためにかける掛け声。

とあるように、元々は深い心遣いを意味していた。

「胡蝶」の巻では、

西の対の御方は、かの踏歌たふかのをりの御対面の後は、こなたにも聞こえか
したまふ。深き御心用みこころもちぬや、浅くもいかにもあらむ、気色いと労あり、な
つかしき心ばへと見えて、人の心隔つべくもしたまはぬ人のさまなれ
ば、いづ方にもみな心寄せきこえたまへり。(胡蝶『源氏物語』③一七四頁)
と、西の対の女主人となった玉鬘たまかみのことを紫の上が、深い気配りという点では、
不足なところもあらうかと評している。

「蛩」の巻では、

南面の御簾の内はゆるしたまへり。台盤所の女房の中はゆるしたまはず。
あまたおはせぬ御仲らひにて、いとやむごとなくかしづききこえたまへり。
おほかたの心用みこころもちぬなども、いとものものしくまめやかにのしたまふ君な
れば、うしろやすく思しゆづれり。(蛩『源氏物語』③二二七頁)

と、夕霧に明石の姫君の御簾の内に入ることは許すが、紫の上の女房の詰め所
に入ることは許さないという場面で用いている。

「常夏」の巻では、

みな立ち寄りて心のままにも折り取らぬを飽かず思ひつつやすらふ。「有
職ありとくどもなりな。心用みこころもちぬなども、とりどりにつけてこそめやすけれ。

(常夏『源氏物語』③二二八頁)

と、玉鬘に思いを寄せる男たちのことを評している。

「藤裏葉」の巻では、

公さまは、すこしたはれて、あざれたる方なりし、ことわりぞかし。これ
は才の際もまさり、心用みこころもちぬ男々しく、すくよかに、足らひたりと世におぼ
えためり」などのたまひて対面したまふ。(藤裏葉『源氏物語』③四三七頁)

と、父源氏と比較し、夕霧のことを評している。

「若菜上」の巻でも、

次々の子のおぼえのまさるなめりかし。まことにかしこき方の才、心用みこころもち
ぬなどは、これもをさをさ劣るまじく、あやまりても、およすけまさりたる
おぼえ、いとことなめり」など、めでさせたまふ。

(若菜上『源氏物語』④二六頁)

と、夕霧が父源氏に劣らないと評している。

「夕霧」の巻では、

さがなく、事がましきも、しばしはなまむつかしう、わづらはしきやうに
憚はまからることあれど、それにしも従ひはつまじきわざなれば、事の乱れ出
で来ぬる後、我も人も憎げにあきたしや。なほ南の殿みなとの御心用みこころもちぬこそ、さ
まざまにありがたう、さてはこの御方の御心などこそは、めでたきものに
は見たてまつりははべりぬれ」など、ほめきこえたまへば、

(夕霧『源氏物語』④四七〇頁)

と、紫の上の心遣いについて述べる。

新編日本古典文学全集全体で検索しても、他には「心用みこころもちひ」が『宇治拾遺物
語』に一例、

今は昔、一条摂政とは東三条殿の兄におはします。御かたちより始め、

心用みこころもちひなどめでたく、才、有様、まことしくおはしまし、(一四二頁)

「心用みこころもちぬ」が『夜の寝覚』に一例、

この御折の心は、ただこの人の御まなるも、かたへは、人から、心用みこころもち
ぬなどぞ、いとよくものしたまひける。(五二二頁)

「御心用みこころもちぬ」が『夜の寝覚』に一例、

言ひ知らざらむ御心用みこころもちぬも罪あるまじく、契りめでたく見えさせたまひけ
る。(二六四頁)

『駒迎へ』論の中で、

また、『駒迎へ』、言葉遣ひ艶にいみじげなるほどよりは、むげに末枯れにぞある。

大将の心用ぬこそいみじけれ。人は口にまかせて、さこそはものは言へども、必ずその筋を通すことは、今も昔もありがたきわざなるを、はじめの趣にて、未まで通したるがいみじきなり。雪の夜、夢見て驚き、渡りながら、いと心苦しげなるありさまを見置きて、たち帰る心などこそ。あまりに情なかめる。(二三四頁)

と、散逸物語であるため詳細は不明であるが、男主人公であろう大将の心遣いに関して、筋を貫き通したことをすばらしいと語っている。

それに対し、「心遣ひ」は、女の論の中の「小野小町」論に、「女御、后は、心にくく、いみじきためしに書き伝へ論られさせたまふばかりのは、いとありがたし。まして末々はことわりなりかし。

色を好み、歌を詠む者、昔より多からめど、小野小町こそ、みめ、容貌も、もてなし、心遣ひよりははじめ、何事も、いみじかりけむとおぼゆれ。

(二六四頁)

と、小野小町が、容姿・顔立ち・態度・心遣いを始めとして、何事も素晴らしかっただろうと述べている一例のみである。

女の論の中で最後に取り上げられる「小野の皇太后宮(歡子)」論で、雪の朝、白河院の御幸が急にあつた時、

南面に打出十具ばかりありける、中より切りて、袖二十出だして、日隠しの間に、院は、御車ながら立たせたまへりければ、汗衫着たる童二人、銀の銚子に御酒入れて、銀の折敷に金の御盃据ゑて、大柑子、御肴にて参りたまへりしほどこそ、いとめでたけれ。かねて用意したらむには、それに

まさること何事かなからむ。にはかにはいとありがたき御用意なりかし。今の世には何事もといふ中に、かやうのことこそ、むげにありがたかんめれ」など言ふなり。(二八四頁)

と、十具だけあつた打出をほどいて、袖を二十にしたことを記している。

「打出」とは、『日本国語大辞典』に、

「うちいでの衣(きぬ)」晴れの席を装飾するために、寝殿や牛車(ぎつしゃ)の簾(すだれ)や几帳(きちょう)の下から女房装束の袖口と褌(つま)をおし出して見えるようにしたもの。衣だけを置く時にもいう。うちいで。うちで。出衣(いだしぎぬ)。

とあるもので、袖をほどくことにより、院に対して大勢のお出迎えをしたという礼を尽くしたものである。この中で、予め心配りするのが、もちろん良いけれど、急な御幸に対して、機転の利いたおもてなしたたとほめる場面で「用意」が使われている。

三 『源氏物語』等における「心用ひ」「心用ぬ」「心用意」

ジャパンナレッジを用いて検索したところ、新編日本古典文学全集『源氏物語』^⑩には、「心用ぬ」が七例ある。

「少女」の巻で、

大臣、太政大臣にありがたたまひて、大将、内大臣になりたまひぬ。世のことどもまつりごちたまふべく、譲りきこえたまふ。人柄いとすくよかに、きらきらしくて、心用ぬなどもかしくものしたまふ。

(少女『源氏物語』③三二頁)

と、内大臣に昇格した夕霧のことを評している。

の宮。葵の上の我から心用ぬ。紫の上きらなり。明石も心にくくいみじ
と言ふなり。(一九一頁)

と、話の引き出し役を果たす若い女房に「すばらしい女性はどんな方々がおり
ますか」と尋ねられた答えの中で、葵の上に「我から心用ぬ」が使われ、自身
を律する「心遣い」を評している。

田淵句美子氏は『無名草子』の視座―物語と教育を繋ぐ^⑤』の中で、

『無名草子』がこうした一種の教育的テクストであると位置づけた時、
『無名草子』の中の「若き声」の意味性が浮かび上がる。老尼からは姿の
見えないこの若い女性は、ここで語らう女房たちから教育をうけるような、
若い女性を象徴する存在ではないか。(略) この若い女性が教えてもらう
立場、つまり教育を受ける女性であり、この女性を軸に展開されているこ
とがわかる。

と述べている。

次に、「好もしき女」で、

六条御息所は、あまりに物の怪に出でらるこそ恐ろしけれど、人さま
いみじく、心にくく、好もしくはべるなり。御子の中宮も、我から心用ぬ
など、いといみじく、心にくき人の中にも交ぜきこえつべきが、などやら
む、嫉ましきは、源氏の大臣のあまりにもてなしたまふが、心づきなかる
べし。(一九四頁)

と、六条御息所の娘の秋好中宮に「我から心用ぬ」を使い、「心にくき人」の
中に入れる方が良いかと説明している。

『狭衣物語』論の中の「人の論」で、

一品の宮の御心用ぬ、ありさま、愛敬なくぞあれど、いとあてやかによき
人なり。物語にかやうなる人のあるは、言ふかひなく惚れ、さらねば行ひ

などこそしためるに、これはいとよし。(二二〇頁)

と、いとこの狭衣大将と結婚し北の方となるが夫婦仲はしっくりしていない一
条院の皇女である一品の宮の「御心用ぬ」に触れている。

『夜の寝覚』論の「めでたき人」で、

女一の宮の御心用ぬ、ありさまこそめでたけれ。

仲らひも、乱りがはしき身の契りこそ、いみじく口惜しけれ、心用ぬい
とよし。さばかり契り深く、かたみに思ひ交はしながら、姉上にはばかり
て、心より外なることこそあらめ、一行の返り事も我とはせじと思ひかた
めたるほどに、関白殿に渡りたまひて後、たとしへなき人の御さまを見る
につけても、忍びがたくて、折々の返り事もわりなく紛らはしてしたるほ
ど、日ごろいみじく浅からず書き交はさむを、この後しも、跡絶えたらま
しかばいかに口惜しからましと、限りなく思ひ知られたるもことわりなり
かし。(二一九頁)

と、女一の宮の気の配り方を褒め、寝覚の上の心遣いもとても良いと評してい
る。

『みつの浜松』論では、

また、『みつの浜松』こそ、『寝覚』『狭衣』ばかりの世の覚えはなかめれ
ど、言葉遣ひ、ありさまをはじめ、何事もめづらしく、あはれにもいみじ
くも、すべて物語を作るとならば、かくこそ思ひ寄るべけれ、とおぼゆる
ものにてはべれ。すべてことの趣めづらしく、歌などもよく、中納言の心
用ぬ、ありさまなどあらまほしく、この、薫大将のたぐひになりぬべく、
めでたくこそあれ。(二三五頁)

と、『みつの浜松』(『浜松中納言物語』)の主人公である中納言の心配りや様子
が理想的で、『源氏物語』の薫大将と同じ類ですばらしいと語っている。

と、一という漢字さえ書いてみせず、屏風に書いてある文字も読まないふりをし、人がいない所では、中宮に『白氏文集』を読んだり「樂府」を教えたりしていることが記される。

『紫式部日記』の中の清少納言について記す箇所で、

清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。さばかりさかしだち、真名書きちらしてはべるほども、よく見れば、まだいとたらぬこと多かり。

(二〇二頁)

と、清少納言が漢字を書き散らしているけれど、よく見ると、ひどく足りない点があると非難している。

田淵句美子氏は「女性による漢字使用について」⁽⁵⁾、

平安期には、漢字に対して平仮名が「女手」と称されるようになり、女性には漢字・漢詩文に対してジェンダー意識に基づく謙退的な姿勢があったことは確かである。(略)母、乳母、女房などが男子を教育する場合に、漢字を教えることは必須であり、少なくとも教育する立場の女性は、漢字や漢学に通暁していたと考えるべきであろう。女子であっても、女房が姫君に漢籍を教えることは、『紫式部日記』の彰子進講だけではなく、多くあつたに違いない。

と述べている。女が漢字に親しむことを好ましく思わない風潮がある一方で、教育する立場である女房としては、漢字が必須だったと考えられ、ひけらかすものではなく、人知れず教えるものであった。講義では、平安時代の真名と仮名に関して振り返りを行っている。

高校教科書の『無名草子』「紫式部」論の続き、

君の御ありさまなどをば、いみじくめでたく思ひ聞こえながら、つゆばかりも、かけかけしく馴らし顔に聞こえ出でぬほども、いみじく、また、皇

太后宮の御事を、限りなくめでたく聞こゆるにつけても、愛敬づきなつかしく候ひけるほどのことも、君の御ありさまも、なつかしくいみじくおはしましし、など聞こえ表したるも、心に似ぬ体にてあめる。かつはまた、御心柄なるべし。」

に、「誰の「御心柄」か。」という問いがあり、「御」がついているので、紫式部の性格ではなく、彰子や道長のご性格であることを説明している。

講読以外の大学の講義では、幅広く作品を取り上げるため一つの作品に対する説明はどうしても短くなる。女の論の中の清少納言と紫式部のみでは『無名草子』の一端しか説明できない。新編日本古典文学全集の女の論の冒頭と、『源氏物語』論・『とりかへばや』論・『今とりかへばや論』も配布し読んでいる。NHK文化センター梅田教室で「無名草子」を味わおう⁽⁶⁾と題して、二〇二〇年一〇月から二〇二二年九月まで講義する機会を得た。作品を前から順に解説する中で、「心」がキーワードであることに気づき、その中でも「心用ぬ」という語に着目した。

二 『無名草子』における「心用ぬ」「心遣ひ」「用意」

『無名草子』の中には、「心用ぬ」という語が七例用いられている。『日本国語大辞典』⁽⁸⁾に、

こころ・もちい^{ちよも}【心用】〔名〕気のくばり方。心づかい。心がけ。また、性格。

とある語である。

『無名草子』の『源氏物語』論の中の「めでたき女」で、

この若き人、「めでたき女は誰々かはべる」と言へば、「桐壺の更衣、藤壺

歌詠みの方こそ、元輔が女にて、さばかりなりけるほどよりは、優れざりけるとかやとおぼゆる。『後拾遺』などにも、むげに少なう入りて侍り。自らも思ひ知りて、申し請ひて、さやうのことに交じり侍らざりけるにや。さらでは、いとみじかりけるものにこそあめれ。

(傍線礪波以下同。)

における「さやうのこと」とは何か。」という問いに関して、指示語のことを説明し、清少納言の父清原元輔が二つ目の勅撰集である『後撰和歌集』の撰者である梨壺の五人の一人であることを押さえた上で、優れた親と比較される子の気持ちも想像してもらっている。そして、段落冒頭の「歌詠みの方」を指しており、「和歌関係のこと」を指すことを解説している。

「紫式部」論では、

「いまだ宮仕へもせで里に侍りける折、かかるもの作り出でたりけるによりて、召し出でられて、それゆゑ紫式部といふ名は付けたり、とも申すは、いづれかまことに侍らむ。その人の日記といふもの侍りしにも、『参りける初めばかり、恥づかしうも、心にくくも、また添ひ苦しうもあらむずらむと、おのおの思へりけるほどに、いと思はずにほけつき、かたほにて、一文字をだに引かぬさまなりければ、かく思はずと、友達も思はる。』
などこそ見えて侍れ。

において、『紫式部日記』の中で、紫式部が女房として新参だった頃、周りの女房達が紫式部のことを、気後れするぐらい立派で奥ゆかしく、近くにいると気づまりであろうと思っていたのに、違っていたことを記している。紫式部の様子を記す「一文字をだに引かぬさま」とはどんな様子か。」という問いに関して、一という文字がどういうものか考えさせ、一という最も簡単な漢字(真名)でさえも書かない様子を指すことを説明している。

『紫式部日記』⁽²⁾の中では、

内裏のうへの、源氏の物語人に読ませたまひつつ聞こしめしけるに、「この人は日本紀をこそ読みたるべけれ。まことに才あるべし」と、のたまはせけるを、ふと推しはかりに、「いみじうなむ才がある」と、殿上人などにいひ散らして、日本紀の御局とぞつけたりける、いとをかしくぞはべる。このふる里の女の前にてだに、つつみはべるものを、さるところにて才さかし出ではべらむよ。

(二〇八頁)

と、漢字の才能があることを、実家の侍女達の前でも隠し、ひけらかしたりしていないのに、『源氏物語』の中身から、天皇が作者は『日本書紀』を読んでいると仰せられたために、「日本紀の御局」というあだ名をつけられてしまつたという話が記される。その後、父に弟が漢籍を習っていた時、弟は読み覚えるのに手間取っていたのに対し、横で聞いていた紫式部が早く理解したので「口惜しう、男子にて持たらぬこそ幸ひなかりけれ」と父が嘆いた話を記す。そして、

それを、「をのこだに才がりぬる人は、いかにぞや、はなやかならずのみはべるめるよ」と、やうやう人のいふも聞きとめて後、「一といふ文字をだに書きわたしはべらず、いとてづつに、あさましくはべり。読みし書などいひけむもの、目にもとどめずなりてはべりしに、いよいよ、かかること聞きはべりしかば、いかに人も伝へ聞きてにくむらむと、恥づかしさに、御屏風の上に書きたることをだに読まぬ顔をしはべりしを、宮の、御前にて、文集のところで読ませたまひなどして、さるさまのこと知ろしめさまほしげにおぼいたりしかば、いとしのびて、人のさぶらはぬもののみまひまに、をとしの夏ごろより、楽府といふ書二巻をぞ、しどけなながら教へたてきこえさせてはべる、隠しはべり。

(二〇九頁)

一 授業で取り上げている『無名草子』について

『無名草子』は、現存最古の物語評論とされ、『大鏡』『宝物集』などと同じく、登場人物が物語・歌集や女性について評論する。著者は未詳だが、藤原俊成の孫である俊成卿女説（つむぎ）が有力で、建久九（建仁二）（一一九八―一二〇二）年頃成立したとされる。八三歳の老尼が、最勝光院で女房たちの語りあうのを聞いて記したという構成で、当時の美意識や散逸物語類を知る好資料である。

花・紅葉・月・雪・文（手紙）・夢・涙・阿弥陀仏・法華経について述べた後、まず『源氏物語』の巻々の論・めでたき女・いみじき女・好もしき女・いとほしき女・男の論・あはれなること・いみじきこと・いとほしきこと・心やましきこと・あさましきことが述べられる。その後、『狭衣物語』『夜の寢覚』『みつゝの浜松』『玉藻』『とりかへばや』『隠れ蓑』『今とりかへばや』『心高き』『朝倉』『川霧』『岩打つ波』『海人の刈藻』『末葉の露』『露の宿り』『みかほに咲ける』『宇治の川波』『駒迎へ』『緒絶えの沼』『初雪』、今の世の物語に関して述べる。これらの物語の中には、今は伝わらない散逸物語が多く含まれる。これらの物語に関して、「まことしからず」と真実らしさがないと述べ、

例の若き声にて、「思へば、皆これは、されば偽り、そら事なり。まことにありけることをのたまへかし。『伊勢物語』『大和物語』などは、げにあることと聞きはべるは、返す返すいみじくこそはべれ。それも少しのたまへかし」
（二五八頁）

と実際にあつた話として、『伊勢物語』『大和物語』の話聞き出す。そして、『万葉集』から『千載集』までの勅撰集および私撰集・歌集・題詠に関して述べた後、女の論として、小野小町・清少納言・小式部内侍・和泉式部・宮の宣旨・伊勢の御息所・兵衛内侍・紫式部・皇后宮（定子）・上東門院（彰子）・大斎院（選

子）・小野の皇太后宮（歎子）の十二名がとりあげられる。

末尾に、男の論に関して、

例の人、「さのみ、女の沙汰にてのみ夜を明かさせたまふことの、むげに男の交じらざらむこそ、人わるけれ」と言へば、「げに、昔も今も、それはいと聞きどころあり。いみじきこと、いかに多からむ。同じくは、さらば、帝の御上よりこそ言ひ立ちなめ、『世継』『大鏡』などを御覧ぜよかし。それに過ぎたることは、何事かは申すべき」と言ひながら。（二八五頁）

と記されている。『世継』は、新編日本古典文学全集の頭注二〇に「『世継』は、広義にはいわゆる歴史物語の意であるが、ここでは『大鏡』と併称されているので、おそらく『栄花物語』というような具体的な作品をさすのであろう。」と説明されるように、「『栄花物語』を指すと考えられる。作品中、色々な質問をして次の話題のきつかけを作り続けた例の若い女房が、女性論ばかりで男性論がなかったことに関して、みつともないと言ったのに対し、男性論に関して歴史物語の『栄花物語』や『大鏡』を見てください。それ以上のことは、申し上げようがないと言いながら、話は続いていくようだという終わり方をする。高校の教科書には、女の論のうち「紫式部」だけ、「小野小町」だけ、「清少納言」と「紫式部」の二つを取り上げたものがあり、「文」^{ふみ}が取り上げられたものがある。^②

大和大学の講義では一回生配当の「国文学概論Ⅰ」にて新編日本古典文学全集『無名草子』の「撰集と女」の一部と「清少納言」を読み、二回生配当の「国文学史Ⅱ」にて『高等学校古典B 古文編』^③の評論『無名草子』の「清少納言」と「紫式部」の箇所を、新編日本古典文学全集の現代語訳や頭注を参考にしながら脚注内の問題を解かせた上で、解説している。

「清少納言」論では、

『無名草子』の「心用ゐ」「心遣ひ」をめぐる

A Study on *Mumyo Zoshi (Story Without a Name)* in regard to "Kokoro Mochiwi", "Kokoro dukahi" (consideration)

礪波 美和子

TONAMI Miwako

(大和大学教育学部)

要旨

本論文では、『無名草子』について考察した。『無名草子』は現存最古の物語評論とされ、『大鏡』『宝物集』などと同じく、登場人物が物語・歌集や女性について評論するのを聞き書きした形式を取っている。教育される立場の若い女房が、話の引き出し役となっている。第一章では授業で取り上げている『無名草子』について説明した。特に、高等学校の教科書に多く取り上げられている清少納言論・紫式部論に関して述べた。第二章では『無名草子』における「心用ゐ」「心遣ひ」「用意」に関して考察した。第三章では『源氏物語』等における「心用ひ」「心用ゐ」「心用意」に関して考察し、今後の『無名草子』の講義では「心」に着目して説明していくことを述べた。

Abstract

In this paper, I analyzed on *Mumyo Zoshi (Story Without a Name)*. *Mumyo Zoshi* is oldest story criticism in Japan. The same as *Okagami (a historical tale)* and *Hoburusshu* (the Collection of Treasures), writing what one hears about Monogatari (tales) and Kasuu (collection of 31-syllable Japanese poems) and women. The young woman of the educated situation becomes the drawer position of the story. In the first chapter, I explained *Mumyo Zoshi* which I lectured. Particularly, I described it about Seishonagon and Murasaki Shikibu which appears in the textbook of the high school. In the second chapter, I analyzed on *Mumyo Zoshi* in regard to "Kokoro Mochiwi", "Kokoro dukahi", and "Youi" (consideration). In the third chapter, I analyzed on *The Tale of Genji* and the like in regard to "Kokoro Mochiwi", "Kokoro Mochiwi", and "Kokoro Youi" (consideration). And then I described that I pay my attention to "Kokoro" in the lecture of *Mumyo Zoshi* in the future.

キーワード：無名草子・心用ゐ・心遣ひ・用意・源氏物語

keyword : *Mumyo Zoshi (Story Without a Name)*, Kokoro Mochiwi, Kokoro dukahi, Youi, *Genji Monogatari (The Tale of Genji)*